

おうこらいこん

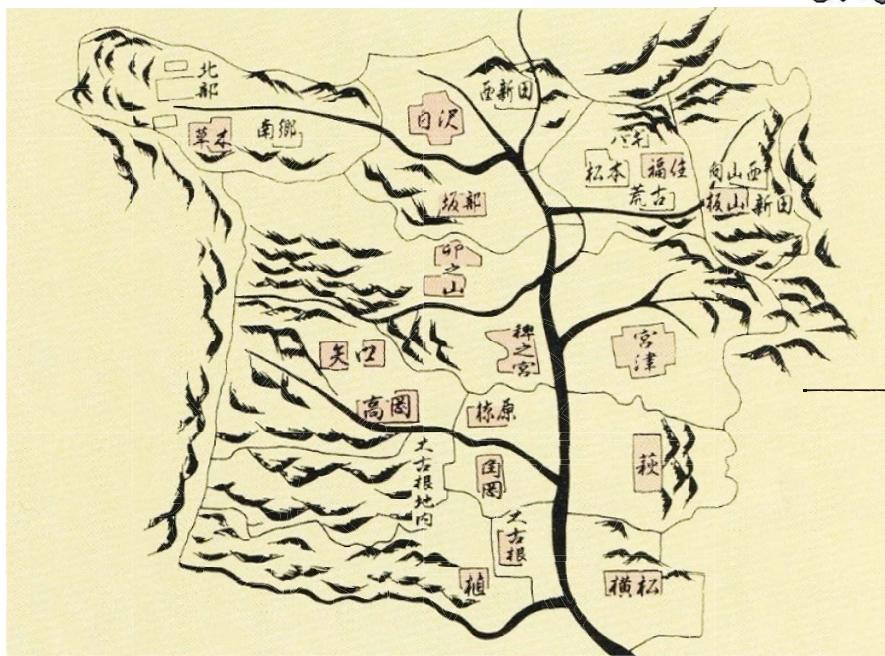
# 阿久比の往古来今

The Past, Present, and Future of Agui

現代



江戸時代



# 第1章 阿久比の黎明

## ■ 第1節 ふるさとのあけぼの

### ● 旧石器時代と縄文時代

人類が打製石器や骨角器を使って、狩りをしたり植物や魚など獲ったりして暮らしていた時代を旧石器時代と呼びます。日本でも、この時代の遺跡や遺物がたくさん発見されていますが、まだ土器を作っていないかった時代ということで、先土器時代と呼ぶこともあります。

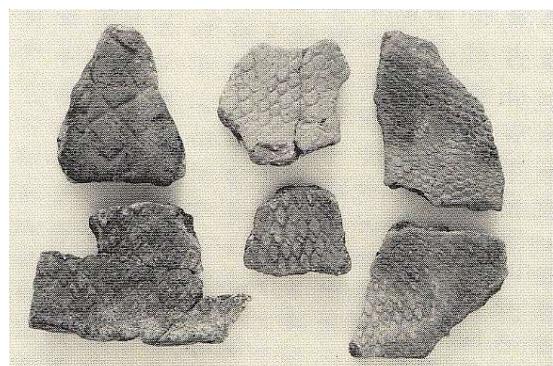
知多半島では、これまでのところ、先土器時代の遺跡は発見されていませんが、それに続く縄文時代の遺物に混じって、ひょっとしたら旧石器ではないかと考えられる石器が、ちらほらと見つかっています。ふつう、旧石器時代の遺跡は、洪積層の台地の上などで発見されるものなのです。しかし、この地方で最も古い縄文遺跡である南知多町の先薙貝塚は、現在の地表面よりも 10 m以上も深いところから発見されていますから、今後知多半島のどこかで、地中深くから旧石器が姿を現すことがないとはいえません。

今から 1 万年ほど前には、海面は今よりも 30 mから 40 mも低かったのですが、その後しだいに気温が上がり、海水面も高くなってきました。それだけ海が陸地の奥まで進んできました。この時期は、考古学でいう縄文時代にあたりますから、これを日本では縄文海進と呼んでいます。先薙貝塚は、ちょうどその縄文海進が起こっている真っ最中に、形づくりされていたのです。これまでに知られている限りでは、東海地方で最も古い、縄文早期という時代の遺跡です。

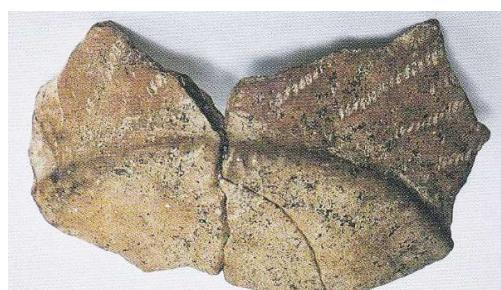
阿久比町内では、この時代の遺跡は発見されていません。しかし、先薙貝塚のことから考えてみると、横松や植大あたりの地中深くに、古い遺跡が眠っているかもしれないというのも空想だとは言い切れなく思われます。

### ● 横松遺跡

横松遺跡は、今までのところ、町内で発見されたただ一つの縄文時代の遺跡で、大字横松字西之海道にあります。表面の土には、少しだけですが貝殻が混じっており、塩を造るときに使った角型土器と呼ばれる奈良時代の土器の一部や鎌倉時代の碗のかけらも見つかっていました。阿久比町教育委員会が、昭和 60 年から数回にわたって試掘調査を行い、縄文時代の土器が発見されました。先薙貝塚よりはずっと新しい時代のものですが、それでも今から 6,000 年ほど昔の縄文前期の土器で、人骨が発見されて話題を呼んだ半田市乙川の西の宮貝塚よりも 3,000 年も古いものです。土器の表面に、よじった糸や縄目を転がしてつけた燃糸文や縄文、竹をたてに割って描いた半截竹管文などの文様がつけられており、底がゆるくとがった形をしています。残念ながら、住居址などは見つかっていませんが、チャートという名前の石で作られた矢じりや黒曜石・チャートのかけらなどが見つかっています。



先薙貝塚出土品（南知多町提供）



横松遺跡出土品 土器（上）・石器（下）

このあたりに人が住んでいたことは確かめられたのですが、この場所に住居があったのか、少し離れたところから遺物が流れ込んできたのかは、まだわかりません。横松遺跡の出土品から、魚や貝、木の実などを採ったり、シカやイノシシを捕まえたりして、それを食糧にしていたと考えることができます。このような暮らし方のことを、採集生活・採集経済と呼びます。知多半島にシカやイノシシがいたことは、ほかの遺跡の遺物からみても間違ひありません。このころには、海面も今とほぼ同じくらいの高さになっていたようですし、その後も阿久比川が多く土砂を押し出したでしょうから、横松遺跡のすぐそばまで海だったようで、ハイガイ・ハマグリ・カキなどを採っていたと思われます。

## ■ 第2節 阿久比の弥生時代

### ● 弥生文化の広がり

縄文時代の稻作は、まだそれで生活を支えるところまではいっていなかった、つまり採集経済を補うものだったと思われます。それに対して、弥生時代には、農業こそが生活を支えるものになっていったのです。もちろん、採集経済がなくなってしまったわけではありませんが、縄文時代とは、生活の仕方が変わったのです。

弥生時代というのは、もともとは縄文土器とは質の違う弥生土器を使う文化をもった時代という意味で、東京の弥生町で発見されたことからつけられた名前です。

弥生時代は、全国的にみれば紀元前3世紀（放射性炭素年代測定では紀元前10世紀）から紀元3世紀まで続いたもので、鉄や青銅を使い、農耕を基本とする弥生文化は、北九州から始まり、かなりの速さで全国に広がったと考えられています。

ところが、知多半島では、北部を除いて農耕を伴った弥生文化がなかなか入って来なかつたようで、弥生中期になってから、隣の半田市岩滑に弥生土器を出土する岩滑遺跡が現れ、阿久比町付近でも稻作が始まったことを確かめることができます。

### ● 町内の弥生遺跡

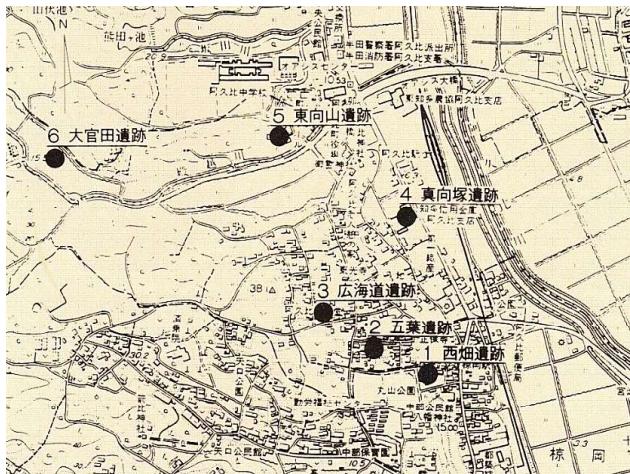
阿久比町内では、これまでのところ弥生中期の遺跡は見つかっていません。発見されている弥生後期の遺跡が、殿越川流域特に阿久比谷に流れ出てくる大字阿久比のあたりに集中していることが注目されます。1か所だけ、少し上流の大字卯坂の上親田で発見されていますが、これも小川に沿ったところです。この上親田遺跡は、発掘調査されたことは間違いないようですが、住居址の一部や弥生後期の欠山式土器が見つかったということですが、残念なことに遺物や記録が保存されていないので、詳しいことはわかりません。

殿越川の南側の大字椋岡字西畠、大字阿久比字五葉と字広海道、北側の大字阿久比字東向山で、それぞれ地表面で土器を拾ったという記録があります。現物は失われてしまいましたが、残された図面から考えると、欠山式土器の高壺と壺の破片のようです。さらに、半田街道に沿った大字阿久比字真向塚の段丘で、土木工事のときに掘り出されたという、高壺の図面が残されています。おもしろい形の高壺ですし、地名の「塚」というのも気になるのですが、土器の出た場所は掘り返されたうえ建物の下になつていて、今となっては調べようがありません。



岩滑式土器（半田市立博物館所蔵）

これらの状況からわかるのは、邪馬台国と同じくらいの時代に、このあたりに人が住んでいたということです。その暮らしがどんなものであったのかはわかりませんが、殿越川の水を使って、稻作を行っていたと思われます。阿久比川の水を利用して、東側のもつと広い低地に水田を開いて



町内弥生遺跡分布図



大官田遺跡出土品

いたかもしれません。川の水を使うためには、川に堰を造り、そこから田に水を引く用水路も造らなければなりません。稻の育ち具合にも、気を配らなければなりません。人々の定住も進むようになります。その定住地の一つが大字阿久比のあたりだったと考えられています。

東向山と上親田のちょうど真ん中くらいの地点にあたる字大官田で、側溝工事のときに一つの土器が見つかっています。6世紀ころのものと思われる土師器の壺です。弥生土器に似ていますが、それよりも新しいものです。時代からいうと、次に述べる古墳時代にあたりますが、周りの状況などからみて、壊れた古墳から出たというよりも、このあたりにそのころの住居があったとみたほうがよさそうです。たった1点の土器ですが、弥生時代と律令時代をつなぐ大切な資料です。

### ■ 第3節 古墳の造られたころ

#### ● 知多半島の古墳

3世紀の末ころから7世紀までが古墳時代です。知多半島で最も古い古墳は、東海市名和にあったカブト山古墳で、4世紀の終わりころに造られた前期古墳と考えられています。残念なことに、土取りなどのために完全に消えてしまった古墳です。

知多半島には、すでに壊されてしまったものも入れると、40基ほどの古墳が知られています。詳しい調査がされていないものも多く、断言はしにくいのですが、カブト山古墳と後に述べる二子塚古墳を除くと、6、7世紀の後期古墳ばかりだといわれています。古墳の分布は東海市から知多市にかけての半島西側の北部、半田市を中心にして大府市・東浦町・阿久比町・武豊町という東側の北部・中部、南知多町の半島先端部の3地域にまとめることができそうです。

日間賀島には、知多半島全部と同じくらいの数の古墳があります。これらの島々の古墳を築いた人々は、後に律令政府から海部という名前で呼ばれ調庸の替わりに贊として海産物を納めることを義務付けられた漁民たちだと思われます。古墳の副葬品から、それなりに豊かだった海の民の暮らしが浮かび上がります。



二子塚全景

#### ● 阿久比の古墳

阿久比町内では、二つの古墳が知られています。その一つは、知多では唯一の中期古墳といわれている大字宮津の二子塚です。形はすっかり崩れていますが、前方後円墳ではないかとされ、町の文化財に指定されています。

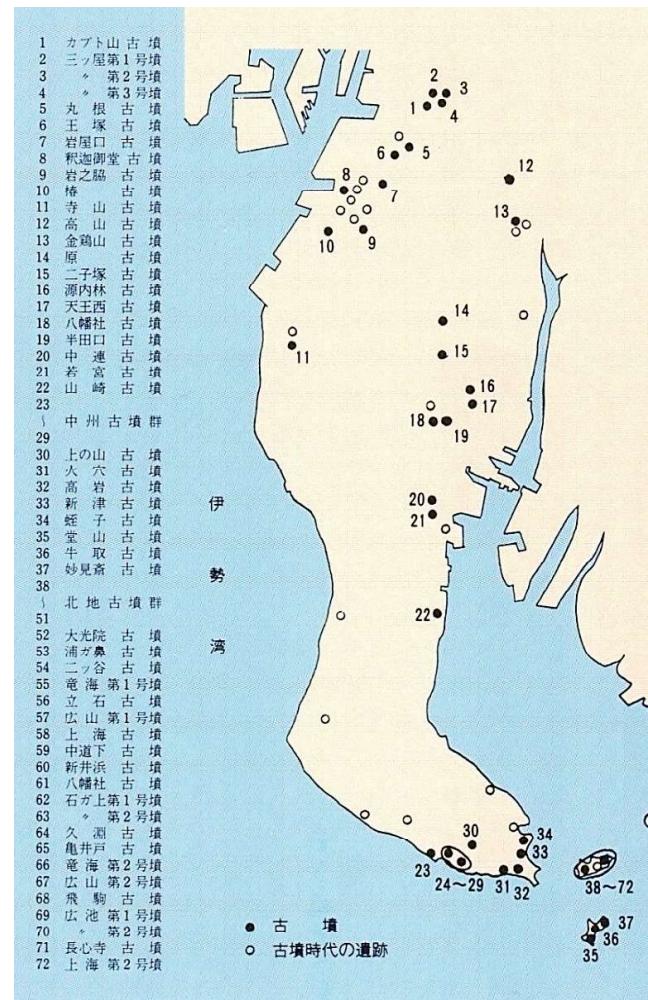
これまで行われた調査では、古墳であることを証明する結果が得られていないため、いろいろな意見が出されているのが実情です。まだ本格的な調査はされていませんし貴重な文化財として守られてきた塚なのですから、これからも大切に保存しながら、十分な時間をかけ、必要な調査（研究）を行う必要があると思われます。この古墳のあるところから、阿久比川をはさんだ対岸の丘陵が、ちょうど前に述べた弥生後期の土器が散らばっていたところになります。二子塚が前方後円墳だとすれば、時代は5世紀にあたりますから、弥生後期の土器を使用していた人々の子孫のうちの有力者か、その子孫たちを支配する別の集団の長かということが考えられます。

もう一つの町内の古墳は、大字福住字原にあった原古墳です。宅地造成のためにすっかり姿を消して、正確な位置もはっきりしないのですが、いろいろな情報を集めてみると、どうやら現在の高根台のあたりにあったようです。阿久比の谷の水田地帯から少し離れすぎている気もしますが、床に石を敷きつめた小さな横穴式石室から出たという須恵器と鉄製の直刀が残されていて、それらから判断して、7世紀の古墳であることは、ほぼ間違ひありません。このころには豪族だけでなく、有力な農民もこの程度の古墳を造ったのです。

須恵器は、朝鮮半島から伝わって来た焼きもので、弥生の伝統を引き継ぐ素焼きの土師器がやわらかく赤褐色をおびてゐるのにたいして窯<sup>かま</sup>を使って焼きしめた灰色の堅い陶質土器です。この窯は、知多半島にはほとんどありません。

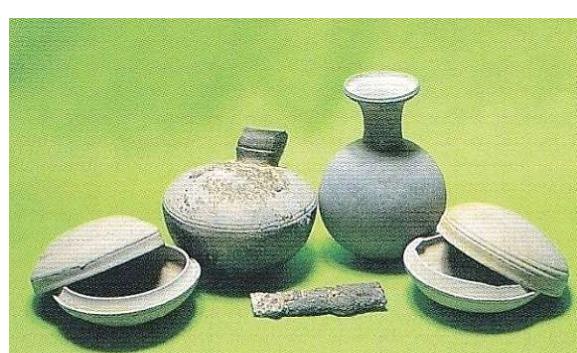
大字阿久比字地蔵山の大塚・小塚は、場所・形・名前などからみて古墳ではないかということですが、そのうちの大塚について発掘調査が行われたことがあります。そのときの記録をみると、どうやら中世の宗教的遺跡のようです。

また、阿久比公会堂の西側丘陵地に上ノ山遺跡があります。ほんの一部ですが試掘をしたところ、溝状の遺構が検出され赤彩の土器片が出土しました。



知多半島古墳分布図

（「美浜誌」（本文編）より転載。18・19」のみ改変）



原古墳出土品



上ノ山遺跡出土品

## ■ 第4節 律令制のもとに

### ● 木簡が語る阿久比

古墳時代には、大陸から朝鮮半島を通って文字＝漢字が伝わって来ます。7世紀の終わりから8世紀にかけて、律令制度ができあがってくると、政治をすすめる必要から、盛んに文字が使われるようになりました。

この時代には、文字は紙に書かれるだけではなく、薄く削って短冊のような形にした木片にも書かれました。紙がとても貴重だったこともあります、木ならば書き損ねたときに削ってもう一度書き直せます。都に納める「調」などの荷物には、紙をはるよりも木の札をくりつけた方が、便利でしょう。このような墨で字が書かれた木片を「木簡」と呼びます。さまざまな用途をもった木簡が、都や役所の跡からたくさん掘り出され、古代の世界がずいぶんわかるようになりました。

何万点という木簡の中の一つに、藤原宮跡から発掘された、表裏に次のような文字の書かれたものがあります。□は長い年月の間に消えてしまって、よく読めない文字です。

(表) 甲午年九月十二日知□□

(裏) 阿具比里五□□部□□□□米□□

甲午年は、694年(持統8年)にあたります。「知□□」は、どうやら「知多評」と書かれているらしいので、後の知多郡を意味しています。そうすると、「阿具比里」は阿久比里の古い表し方だとみてまず間違いないことになります。「五□□部」は、「五百木部」と読みそうで、それならイオキベという氏の名です。また、米という字の前後は「養米六斗」らしいので、正式には「庸米」と呼ばれるものの付札です。

だとすると、これは阿久比に関する最も古い文献だということになります。「今から1300年の昔、知多郡阿久比村に住んでいた五百木部さんが、働き手として都にかり出されていた身内の食糧分として送った米に添えられていた木簡」なのです。都の役所では、米が収納され納入者のチェックがすめば、もう不用になりますから、ごみとして捨てられたのでしょう。

上京していたのは、朝廷内の雑役に従う仕丁か、警備にあたる衛士のどちらかになっていた成年の男性だったと思われますが、ひょっとすると天皇や皇后の身の回りの世話をする采女という若い女性だったかもしれません。采女は、郡司など地方豪族の姉妹か娘のうちから選んで、送り出すことが、法律で決まっていました。

この木簡の年代から40年後にあたる734年(天平6年)度の「尾張国正税帳」という史料に、知多郡の郡司の4番目の地位である主帳の伊福部大麻呂という人物が署名をしています。伊福部と五百木部とは同じ氏の別の書き表し方ですし、郡司は世襲が原則でしたから、養米を送った40年前の五百木部氏も郡司一族だった可能性が高いのです。

ところで、「阿具比」は3文字で表されていますが、奈良時代の初めに、地名は良き名を付け、2文字で表すという法律が出されました。さらに、里を改めて郷とする改定も行われています。平城宮跡から出土した木簡に、それが阿久比では具体的にどう変わったかを示すものが3点あります。



平城宮から出土した篠島木簡

藤原宮木簡（右表・左裏）  
(奈良国立文化財研究所許可済)

- ① 尾張国知多郡英比郷□
- ② 英比郷和尔部□□  
天平十□□十□
- ③ 英比郷□塩一□

まず、①からは「英比郷」がほかでもない知多郡の地名であることが確かめられ、「阿具比里」が「英比郷」に変わったことがわかります。だから英比は「えいび」ではなく「あぐい」なのです。②からわかるのは、そこに和尔部氏が住んでいたことです。ほかの木簡から知多郡には和尔部一族がたくさん住んでいたことがわかっていますし、先ほどふれた「尾張国正税帳」にも郡司の次官として和爾部臣若麻呂が署名していますから、知多では最も有力な氏だったと思われます。そして、③によれば、阿久比から塩を納めていたことになります。知多市朝倉や美浜町野間などから成人男子にかけられる税である調として納められた塩につけられた木簡が同じ平城宮跡で発掘されていますし、知多半島の海岸にはいたるところに当時の製塩遺跡がありますから、阿久比から塩が納められても不思議ではないのですが、③の税目が何であるかはわかりません。

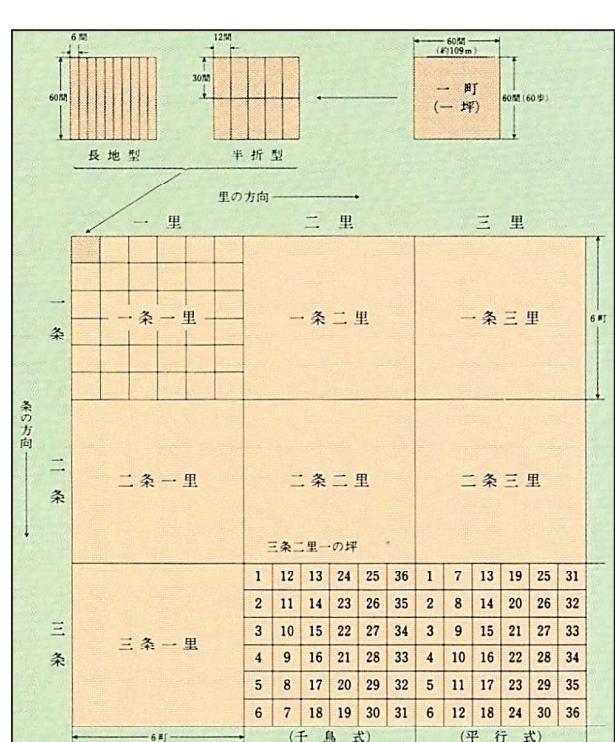
阿久比町内では製塩遺跡は見つかっていません。よその地域から手に入れたとも考えられますが、現在の半田市乙川が中世には英比郷の一部であったことがわかっていますから、この時代にも英比郷が乙川などを含んでおり、横松遺跡から発掘された「角型土器」から推して、英比郷の内部には塩造りに適した海岸があったと考えておくほうがよさそうです。

## ● 条里の名残

律令時代には、6歳になると口分田を分け与えられ、死後それを国家に返す班田収授の制度が行われていたことは、よく知られています。きまつた面積の土地を分けるためには、土地の面積がきちんと測られ、区分しやすいように仕切られていなければなりません。律令政府はそのために時には開墾予定地も含めて、耕地を整然とした区画で仕切る大工事を行いました。

まず大きく6町(約650m余)の正方形に仕切れます。それを里と呼びますが、それを連ねたものを東西に1里・2里・3里と数えます。南北には1条・2条・3条と数えるので、このような土地割を条里制と呼ぶのです。何条何里といえば、場所がわかります。この内部を縦横6つの合計36の正方形に仕切れます。そうすると、1辺が109m足らずになります。これを坪と呼んだので、古代の坪は1万2,000m<sup>2</sup>ほどもあり、現在の1坪(約3.3m<sup>2</sup>)とはまったく違うので注意が必要です。この坪の数え方は、図を参照してください。並行式と千鳥式があります。

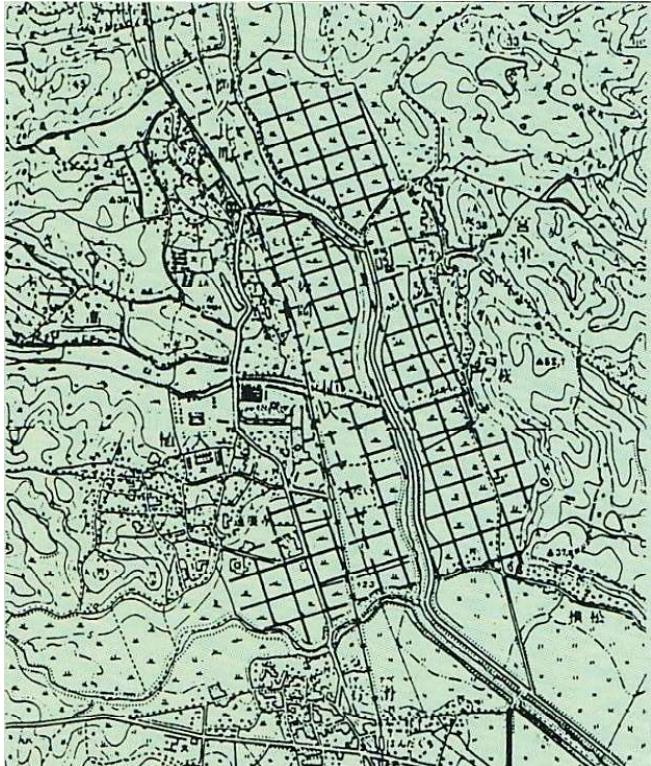
さらに、この坪を10に仕切るのですが、縦に10等分する長地型と横に2等分したものを5つに仕切って10に区分する半折型の二つのやり方があります。この一つが1反という単位となります。1反は360歩ですから、男は2反、女はその3分の2という班田の基準にうまくあっています。



条里制模式図



ほ場整備前の航空写真（昭和 23 年）  
連合軍 B29 撮影（国土地理院使用）



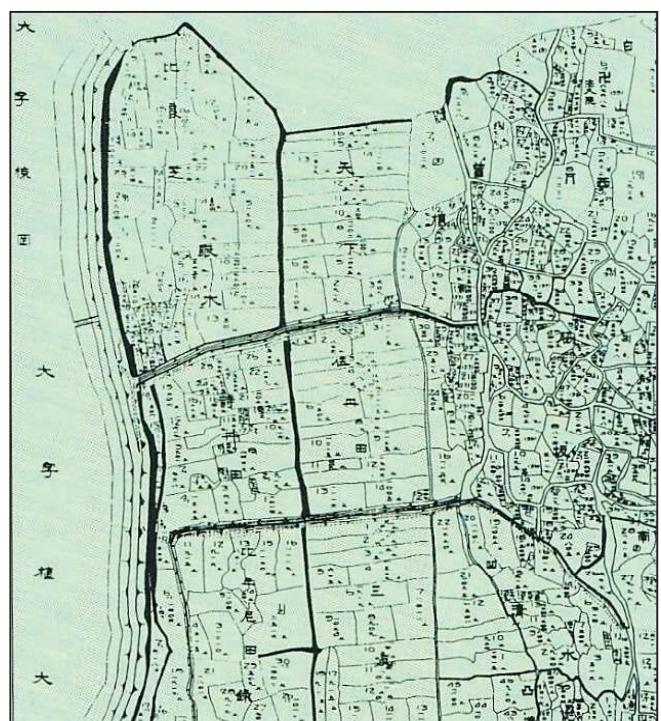
条里制遺構分布図  
(水野時二『条里制の歴史地理学研究』より)

班田収授の制度そのものは、わりあい早く崩れていくのですが、水田の畔<sup>あぜ</sup>というものは水路の引き方によって決まりますし、水路はなかなか変わりにくいので、どうしても一度作られた区画が残りやすくなります。壊れた場合でも同じようなところに、もう一度水路を引いたり、畔を作ったりしますから、形はくずれても、似たような地割りがまたできあがります。

耕地整理以前の地籍図や、米軍の撮影した航空写真、水野時二「条里制遺構分布図」などを見ると、殿越川のあたりから矢勝川のあたりまで、阿久比川の両岸に、条里の名残つまり条里遺構のような地割りを見つけることができます。本格的な条里に比べると小さなものですか、いくつかの坪は並んでいます。これがそのまま古代の畔の跡だと決めてかかるわけにはいきませんが、少なくともそれを引き継いで何度か作り直された畔の名残であると考えてもよいものでしょう。

大きな機械を使うようになる前の水田というものは、それほど形を残すものだったのです。今日では、それらはすべて姿を消し、文献や地図、写真の上でしかみることができなくなりましたが、かつてこのような地割りが残され、条里制との関係を示す「詩丹田（四反田）・伍丹田（五反田）・録丹田（六反田）」などの地名が残っていたことは阿久比町が古くから「米どころ」であったことを物語っているように思われます。

知多半島のなかで、条里の跡らしいものが残っていたのは、東海市と知多市の一部、常滑市の大野谷、



萩地区地割り図（昭和 10 年『土地宝典』）